

大学出版

No.46

2000
夏



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会



大学出版
46号

Summer・2000

読書の周辺 読書ノートを執る意味 ▼ 石塚 正英 — 1

読書の周辺 二世紀社会における協同組合の新天地 ▼ 白石 正彦 — 6

第四回日・韓・中大学出版部協会合同セミナー予告 ▼ 三浦 義博 — 11

東京国際ブックフェア2000出展報告 ▼ 斉藤 勇 — 12

新加盟校の紹介

遅まきながらの大学出版会—関西学院大学出版会の由来— ▼ 山本 栄一 — 14

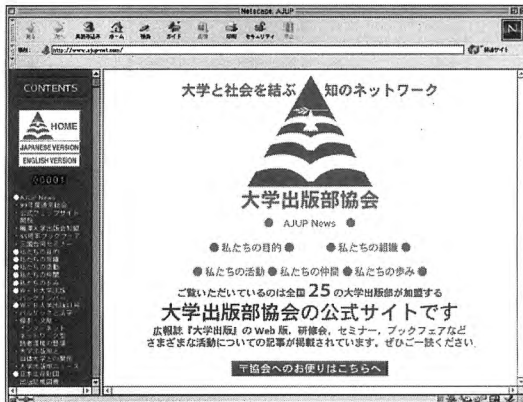
歩く・見る・聞く 知のネットワーク19 — 16

大学出版部ニュース — 18

新刊案内2000.46 — 28

表紙イラスト「ヨースト・アマン」『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン「道吉 剛」

〈書籍の表示価格は税別です〉



大学出版部協会ウェブサイト
<http://www.ajup-net.com/>

読書ノートを執る意味

石塚 正英

一 読書ノート執りは思索の端緒

読書ノートを執るという行為はすでにして思索＝創作＝執筆の端緒であるということ、これが私の著述活動の基本である。以下に、例として一九六八年の秋頃に執った或るメモを引用しよう。

「じゃ、自分の考えなんてそっとしておけばいいでしょう！ なぁに、愛しておれば、思想なんて問題じゃありませんよ。僕の愛している女が、僕と同じように音楽を愛していたって、それが僕にとってなにになるでしょう！ ぼくにとっては、その女こそ音楽なのです！ あなたのように、愛し愛される可愛い娘があるという幸運にめぐまれたら、彼女は自分の好きなものを信ずるがいいし、あなたはあなたで自分の好きなものをなんでも信ずればいいのです。結局、あなたたちの思想には、優劣はないのです。この世には真実のものは一つしかありません。それは、愛し合う

ことです。」(ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』から)
このメモを執ったとき、一八歳の私は、田舎に暮らす或る女性への炎のごとき恋愛のつぼに、乱調の美の真っ只中に身をおいていた。そしてまた、ちょうどその頃、一方ではカミュ『異邦人』の非合理を地肌に快く感受し、他方ではジェルジュ・ルカーチ『理性の破壊』における合理で理論武装し、しかもひそかに蠱惑のジュリエットと清廉のジュスティヌにアンビバレントな好意を抱いて惹きつけられるなど、目標の定まらない思想的自己革命を開始しつつあった。何が成果で何が敗北か、それは、行動しつつも時にはっとしてふりかえる己れの生きざま＝轍(わだち)にも、にわかには見いだせなかった。しかし諸関係に屈がおとずれ、しばし静寂をえて読書ノートに一瞥を投げやる佇みにおいて、私はわが身体をもってペンを走らせた紙片に出入や転変、紆余曲折の軌跡を発見したのである。

私は、二〇歳から二三歳の頃にかけて社会思想史に関連

する著述活動を開始した。そして二五歳でヴァイトリングに関する最初の著作『叛徒と革命——ブランキ・ヴァイトリング・ノート』（イザラ書房、一九七五年）を刊行した。その原動力は読書ノート執りである。

本稿冒頭で記したように、読書ノートを執るという行為はすでにして思索⇨創作⇨執筆の端緒である。一見すると似たような作業であるが、他人の文章を剽窃する行為は読書と呼ばれるし、その行為によって出来上がった抜粋を読書ノートとは呼ばない。また、私の読書ノートは、忘れないためのメモではない。さまざまな文献中、なにがしか意識にとまった部分を、ほかでもない自分に使い易いような資料や史料として引き出してそこに自分なりの意味を添える行為なのである。そうであるから、引き出すという行為、それは私の創作に含まれることになる。三〇年前に読書ノートに仕込んだ史料・資料を創作⇨執筆の目的でいま初めて使うことは、一度ならずある。

わが読書ノートについて雑誌類で話題にするのは、今回が初めてではない。以前に『週刊読書人』（第二一九号、一九九六年一月）に寄せた「読書ノートを執って二五年」と題するエッセーにおいて一度書いている。その時の反響の一つを紹介する。

雑誌『エコノミスト』（毎日新聞社発行の週刊誌）一九九六年二月六日号の冒頭「敢闘言」において、日垣隆という編集人が私の文章に読後感を寄せてくれた。その中で私

の読書ノート執りを少々ひやかしてくれた。とはいえ、筆者の日垣隆氏は私と私の読書ノートのことを詳しくは知らないで、私を誤解している。その分、どこか滑稽でもあるから、以下に前半を引用してみる。

『週刊読書人』の一月二六日号に、石塚正英という立正大学（いまは東京電機大学——引用者）の先生が、「読書ノートを執って二五年」と題した随筆を書いている。専用ノートを用意したのは二〇歳の時だそうで、最初はフォイエルバッハ『ルドルフ・ハイムに対する返答』から抜粋したらしい。私はてっきり後悔録としてこのような文章を綴っておられるのかと思ったら、そうではなかった。「この読書ノート群は、著述活動における私の力である」。あちゃあ。およそ読書ノートにメモらなければ忘れてしまうような内容は、忘れてしまうべき程度のものなのであり、ノートをつけながら読書すればスピードはガクンと落ち、一冊に何日もかければ理解も浅くなりがちだ。にもかかわらず、読書ノートをもとに論文を捻りだす訓詁学者らによる陳腐で難解な切り張り本は後を絶たない」。

あの有名な『エコノミスト』誌の「敢闘言」に私のエッセーに関する記事が載ったのは、なるほど、たいへんうれしい。しかし日垣隆という筆者は、あまりにも私の著述活動を知らなさすぎである。事実の背後を確認しないままこのたぐいのお笑いの記事を即興で書いてしまうようなジャーナリストは、とうてい私の相手にならない。週刊誌の記事

によくある雑文でなく、思索と実証に支えられた論説を書き上げる著述家は、常に裏付けをとりつつ先へ進む。そのため、その労力は惜しまない。とりわけ私の場合は、毎年各地でフィールドワークを続行している。机上の学問とは縁遠い。私のそのような活動を、日垣氏は知らないのである。

二 読書ノート執りは執筆活動の源泉

私は、作家など著述を専門の職業とする人をのぞけば、研究者としては著作の多いほうである。先日、国会図書館のホームページを開いてみたら、私の著作・編集本として二八点が確認できた。それは自著の一部でしかない。このところ毎年三点の割合で出版している。研究書の書評は平均で年三、四点は行なう。そのほか、百名以上の執筆者を擁する事典類の編集、七百以上の会員を抱える学会の機関誌の編集、二〇年近く継続し既刊一二〇号をこえるようになった研究誌の単独編集というように、編集作業も数々手懸けてきている。かつて専任教員の職を得ようと或る公募先の大学に業績一覧を送ったら、こんなにたくさん書いているのにまだ就職がきまらないということは、きっと人物に問題があるにきまっている、と思われたほどである。事情を知らぬ者はそう思う。それに対して、事情に通じた者は、生半可に知っているだけに、反転して嫉妬とやっかみでこちらを排除にかかる。業績を悪用して私を人事の当馬候補に利用した大学もある。

読書ノートを執る人、いつも新聞記事を切り抜く人、というように私のことを理解する者は、私にとって読書ノートや切り抜きは汲めど尽きせぬ創作の源泉であることを承知してくれている。新聞切り抜きは一九七四年から継続しているが、この作業もハサミで紙を切るという動作をするため、身体を使う。ペンでノートに書き込むとか、ハサミで切り張りするとか、こうした行為は電子メディアが発達した現在では、現象としてはたしかに陳腐になりつつある。しかし、インターネットを利用して資料を収集し、マウスを動かしてコピーやショートカットをし、あるいはキーボードをたたいて作文したり図表を作成したりすれば、読書ノートや切り抜きと同様の効果はかたちを変えて相変わらず継続できるのだ。

三 著作こそ最大の読書ノート

いまちょうど『週刊読書人』から一点新刊の書評を頼まれており、読書中である。その新刊は武井勇四郎『チェルヌィシェフスキーの歴史哲学』（法律文化社、二〇〇〇年）である。本論つまり内容以前に、「あとがき」で一つ興味深い記述にであった。「自分の過去の亡霊が今の変身した自分に付きまとうことがある。自分にとってはとうに過ぎ去ったことなのに突然、手紙や電話であの論文の続きはないのですか、とお寄せいただく。……どうも自分の過去を叩いてやっていないのではないかと識った。本にして供養

するのが一番と思った。……内容は一切手を加えずそのままである。この発言を解釈すれば、本著作刊行の直接の動機は著者の内的なものにでなく、読者からの問い合わせという外的なものにあるようだ。

初を一覧を見ると、この本の原稿は一九六九年から一九七六年にかけて書かれている。一九三三年生まれの著者は、学生時代にロシア思想に心酔し、やがてモスクワ在住の研究者からチェルヌシエフスキー「六巻全集を送ってもらって感激し、その線で研究テーマを決定し、修士論文「チェルヌシエフスキーの空想農民社会主義について」（一九六二年）を書き上げた。論題から察して、著者のチェルヌシエフスキー読書はマルクス・レーニン主義的なイデオロギーによって方向を決定づけられていたのだった。

さて、そうしてできあがった論文は、系統立てられて書き留められたものの、著者個人にしてみれば、一種の読書ノート群——抜粋よりも摘要・評注の多いノート——である。著者は、その後にまちうけるマルクス・レーニン主義の運命に身を任せることを潔しとせず、その読書ノートを完成させて著作とし公表することを断念した。一九七〇年前後を境として、内外の思想界・読書界においてロシア思想を読む機軸がドラスティックに変化してしまったからだ。しかし、二〇〇〇年のこの現状において、著者は、ついに自らの読書ノートに弔いのピリオドをうつ決意を下したというわけである。「内容は一切手を加えずそのまま」な

だから、たしかに弔いの鐘が鳴り響く。

ところで、葬り去りたいなら、なぜ出版するのだろうか。その理由はしごく簡単である。著者はかつて発表した己れの著作をまったく亡きものとするのではなく、歴史的な証言として今後に存在させるべく遺書としてのこし、その存在を墓碑に刻みたいがためなのである。著者は若き日々に研究した成果を内的には大切に思っている。たとえ活字をノートに書きうつさなかったとしても、かつて続々と発表した論文群は広い意味でチェルヌシエフスキー全集の読書ノートなのである。

そのような思いから著作を刊行した例を、私はほかに知っている。一つは恩師の大井正が晩年に復刻した『現代哲学』（世界書院、一九八七年）と『フォークローアとエスノロジー』（原題は「東印度の農耕儀礼」）（世界書院、一九九一年）である。いずれも私が編集した。前者は、武井著作と同様、マルクス・レーニン主義との絡みで敢えて再刊したものであり、後者は満鉄調査部時代の原稿をいままら半世紀ぶりに刊行するという意味で、やはり「歴史的証言」に近い刊行物となった。

そのほか、私自身の著作でも、二点ほど似たような経緯をたどっているものがある。一つは上に挙げた第一作『叛徒と革命——ブランキ・ヴァイトリング・ノート』であり、いま一つは『文化による抵抗——アミルカル・カブラルの思想』（柘植書房、一九九二年）である。前者は一九七〇

二一世紀社会における協同組合の新地平

白石 正彦

一、世界最大の民間組織としての

協同組合と国際協同組合同盟

一九九五年にコペンハーゲンで開かれた国連社会開発世界サミットのための背景資料によると「協同組合人の総数は世界で八億人にのぼると推定され、加えて一億人の人々が協同組合に雇用されている。……協同組合事業によってかなりの程度生活が保証されている人々の総数は三〇億人に達し、これは世界の半分の人口にあたる。」と、非営利協同組織としての協同組合の現代的意義を強調している（ICCA: Review of International Co-operation Vol.88, No.3）。

一八九五年に創設された国際協同組合（International Co-operative Alliance、以下ではICAと略す）は、本部を現在、スイスのジュネーブに置き、世界の大部分の協同組合が加盟し、一九九八年には会員は九三カ国、組織数

（国際組織四を含む）は二三六組織、単位協同組合数は約七五万でその傘下の組合員は一九九八年現在七億三千万人と世界最大の民間組織である。しかも、組合員数の五七％がアジアであり、アメリカが二五％、ヨーロッパが一六％、アフリカが一％とアジア・アメリカの比重が高い。

このように従来、協同組合といえば一八四四年に創立された英国のロッチデール公正先駆者組合やフランスの労働者生産協同組合、ドイツの農村部のライフアイゼン系あるいは都市部のシュルツ系の信用組合（両組織は一九七二年に統合）、デンマーク・オランダ等の農業協同組合などの自発的で自助組織としての伝統的なイメージはヨーロッパが中心であるが、現段階ははるかにグローバルな広がりをもたせアジアとアメリカで七割の組合員数を占めている点が目される。

ちなみに、日本からは、ICAに①全国農協中央会、②全国農業協同組合連合会、③全国共済農協連合会、④農林

中央金庫、⑤全国新聞情報農業協同組合連合会、⑥家の光協会、⑦全国漁業協同組合連合会、⑧全国森林組合連合会、⑨日本生活協同組合連合会、⑩全国労働者共済生活協同組合連合会、⑪日本労働者協同組合連合会など一一の全国組織が加盟し、単位協同組合数は三八六〇、組合員数は約四千三百万人である。

二、協同組合の定義・価値・原則と実践現場

世界最大の民間組織としての協同組合が結集しているICAは、一九三七年に協同組合原則（七原則）を制定し、一九六六年には協同組合原則の改定（六原則）を行った。さらに、一九九五年には、協同組合の定義・価値・原則を包含した「協同組合のアイデンティティに関するICA声明（ICA Statement on the Co-operative Identity）」を英国のマンチェスターで開催されたICA創立一〇〇周年記念大会の論議をふまえて総会で決定した（Ian MacPherson: Co-operative Principles for the 21st Century, ICA, 1996）。

ICA声明の「協同組合の定義（Definition）」の中で「協同組合は、人びとの自治的な組織（an autonomous association of persons）であり、自発的に手を結んだ人びとが、共同で所有し民主的に管理する事業体（a jointly owned and democratically-controlled enterprise）を通じて、共通の経済的、社会的、文化的なニーズと願い（their

common economic, social, and cultural needs and aspirations）をかなえることを目的とする。」と協同組合の組織主体、手段、目的を明確にしている。

「協同組合の価値（Values）」の中で「協同組合は、自助、自己責任、民主主義、平等、公正、連帯という価値を基礎とする。協同組合の創設者たちの伝統を受け継ぎ、協同組合の組合員は、正直、公開、社会的責任、他人への配慮という倫理的価値を信条とする。」と協同組合が堅持する価値ならびに組合員が堅持する倫理的価値を鮮明にしている。

さらに、協同組合がその価値を実践するための指針である「協同組合原則（Principles）」として、①《第1原則》自発的で開かれた組合員制（Voluntary and Open Membership）、②《第2原則》組合員による民主的管理（Democratic Member Control）、③《第3原則》組合員の経済的参加（Member Economic Participation）、④《第4原則》自治と自立（Autonomy and Independence）、⑤《第5原則》教育、研修、広報（Education, Training and Information）、⑥《第6原則》協同組合間協同（Co-operation among Co-operatives）、⑦《第7原則》地域社会への関与（Concern for Community）の七つの原則を掲げ、そのうち一から三までは協同組合内部の原則、四から七までは協同組合の内と外に関わる原則である。また、《第4原則》自治と自立と《第7原則》地域社会への関与

は、一九三七年原則や一九六六年原則にはなかった二世紀型の新しい原則である。

以上のうち《第2原則》組合員による民主的管理については、「協同組合は、組合員が管理する民主的な組織であり、組合員は、その政策立案と意思決定に積極的に参加する。選出された役員として活動する男女は、すべての組合員に対して責任を負う。単位協同組合の段階では、組合員は平等の議決権（一人一票）をもっている。他の段階の協同組合も、民主的方法によって組織される。」と組合員の参加型民主主義ならびに男女協同参画型の役員の役割を明確にしている。

さらに、《第7原則》地域社会への関与については、「協同組合は、組合員が承認する政策にしたがって、地域社会の持続可能な発展（the sustainable development of their communities）のために活動する。」と協同組合の社会的責任を明確にしている。

以上のICA声明の策定にあたっては、一九九三年のICA総会でICA原則改定・宣言検討委員会（委員長はカナダのビクトリア大学イアン・マクファアソン教授・協同組合の歴史学者）に原案作成が委嘱され、私も七人のメンバーの一人としてこの作業に参画する機会に恵まれた。第一回は、一九九三年九月にスイス・ジュネーブのICA本部、第二回は一九九三年十二月にメンバーの一人であるハンス・ミュンクナー教授（協同組合の法学者）が所属する

ドイツ・マールブルク大学、第三回は一九九四年四月にメンバーの一人であるイエフ・パズ博士（所長）が所属するイスラエル・テルアビブにある協同組合研究所、第四回はチェコ・プラハのチェコ協同組合中央会で開催され、私も日本や諸外国の協同組合関係者の意向や日本・韓国等の協同組合学会の意向も集約しつつ、これらの会合で論点の意見表明と具体的な原案策定に関わってきた。

これらの策定過程の論議や決定された「協同組合のアイデンティティに関するICA声明」の意義については、白石正彦「二一世紀に向けての協同組合原則―アイデンティティ声明と宣言―」（白石正彦監修『新原則時代の協同組合―持続的改革に向けて―』（家の光協会、平成八年）の中で私の見解を明らかにしている。

日本の協同組合の実践現場の動向をみると、以上のICA声明をふまえて例えば全国農協中央会において平成九年に第二一回JA大会で「JA綱領―わたしたちJAのめざすもの―」を決定した（私もこの検討委員会メンバーとして関わってきた）。その前文には「わたしたちJAの組合員・役職員は、協同組合運動の基本的な定義・価値・原則（自主、自立、参加、民主的運営、公正、連帯等）に基づき行動します。そして、地球的視野に立って環境変化を見通し、組織・事業・経営の革新をはかります。さらに、地域・全国・世界の協同組合の仲間と連携し、より民主的で公正な社会の実現に努めます。このため、わたしたちは次

のことを通じ、農業と地域社会に根ざした組織としての社会的役割を誠実に果たします。」とICA声明の内容を盛り込んでいる。

三、市場経済社会における私企業・協同組合・政府

一九八〇年にICAの第二七回モスクワ大会に提出・承認を得た正式の報告書である“Co-operatives in the Year 2000”（日本協同組合学会訳編、A.F.Laidlaw著『西暦二〇〇〇年における協同組合「レイドロー報告」』、日本経済評論社、一九八九年）は、カナダの協同組合運動家であるA・F・レイドロー博士によってとりまとめられ、世界的に協同組合の実務家のみでなく協同組合研究者にも大きな反響を呼び起こし、日本や韓国等で協同組合学会の設立の契機にもなった。

本報告書では「公的、私的セクターおよび協同組合セクターのどれをとっても、単独では、現在までのところ、全ての経済問題を解決し、完全な社会秩序をととのえることはできなかったし、……三者が一緒に並んで活動し、相互に補完することによって、人間の力で可能な最良なものを達成しえよう。」「協同組合セクターは、思想的には他の二つのセクターの中間の位置を占める。すなわち、いくつかの点では公的セクターに似ており、その他の点では私的セクターに類似しているが、概して両者から最も望ましい特質を採用しようとしている。」「協同組合は私企業とは区

別される立場にあり、その目的や方法の多くに反対しているが、同時に協同組合人は、社会的秩序のなかで資本主義の各付けによいものと悪いものがあるということを確認する。」「一方では国家に対する、他方では私的セクターに対する協同組合の立場は、当然、時によって多面的かつ柔軟でなければならぬ。」「協同組合思想は一方では極端な国家主義、他方では圧倒的で貪欲な資本主義という両側面から脅かされている。」と当時の社会主義諸国や第三世界の政府による協同組合への干渉、ならびに第三世界における金貨など小商人による収奪を批判している。

さらに、協同組合の将来の選択として、①第一優先分野——世界の飢えを満たす協同組合（人類の食糧の分野での貢献）、②第二優先分野——生産的労働のための協同組合（雇用を創造する労働者協同組合の新しい役割）、③第三優先分野——保全者社会のための協同組合（消費者協同組合の革新）、④第四優先分野——協同組合地域社会の建設を強調している。

ICAは以上のような国際協同組合運動の将来展望を明確にし、ヨーロッパ以外では初めてアジアの東京で開催されたICA第三〇回大会では、スウェーデン協同組合学会のS・A・ベーク会長がICA「協同組合の基本的価値」プロジェクト座長として取りまとめた『変化する世界における協同組合の基本的価値（Co-operatives Values in a Changing World）』が採択された。ベーク座長は、この

中で協同組合が取り組むべき「グローバルな基本的価値の枠組みについての勧告」として、①ニーズに応える経済活動 (Economic Activities for Meeting Needs)、②参加型民主主義 (Participatory Democracy)、③人的資源の発揚 (Human Resource Development)、④社会的責任 (Social Responsibility)、⑤国内的・国際的な協力 (National and International Co-operation) の重要性を提起すると共に、一九六六年のICA協同組合原則の改正を提起し、この流れの中で前述したように一九九五年に「協同組合のアイデンティティに関するICA声明」が決定された。なお、これらの基本的価値・原則の論議の意義については、白石正彦監修『協同組合の国際化と地域化——二一世紀の協同組合像を展望する——』(筑波書房、一九九二年)の中で私の見解を明らかにしている。

四、二一世紀社会における協同組合の新地平

各地域の協同組合がICAに結集しながら、二一世紀社会における協同組合の新地平をいかに切り開くかが大きな課題である。この点について、一九九九年に開催されたICAケベック大会でイアン・マクファーソン教授は「新千年紀に向けての協同組合の挑戦」として①組織的な変革〈より良い管理水準の達成〉(O)、②特異性の発揮〈地域への密着性〉(P)、③技術革新〈コミュニケーションの距離的障壁の克服〉(T)、④国際的なつながり〈境界線を超え

てネットワークやパートナー関係〉(I)、⑤動員〈広範囲な財政的・人的資源の動員、伝統的な境界線を超えた資源プール〉(M)、⑥包含〈ヘルスケアなど社会的協同組合市民社会の維持〉(I)、⑦社会的関与〈環境問題、食品の安全、貧困の低減などのための新事業の開発〉(S)、⑧組合員〈組合員を脱退させない方法、組合員であることの意味、組合員と協同組合間の関係拡大〉(M)の八つのキーワードをまとめた「OPTIMISM＝楽観主義」を強調している。

また、グローバルな市場経済化は、「勝者がすべてをとる、ひとり勝ちの社会」という弱肉強食の競争激化を伴い、ロベルト・ロドリゲスICA会長はICAケベック大会で「集中が今日の経済モデルの一面であるとすれば、他の一面は排除です。……その最悪の結果が失業です。」と市場経済の失敗(負の側面)を警告し、「協同組合は包容的(inclusive)組織であり、排除の組織ではありません。」と協同組合運動の現代的意義を強調している。

(東京農業大学国際食料情報学部教授)

第四回日・韓・中大学出版部協会合同セミナー予告

三浦 義博

開催日時：2000年8月25日

開催場所：滋賀厚生年金休暇センター

韓国大学出版部協会派遣団：16大学出版部20名
中国大学出版社協会派遣団：14大学出版社16名
セミナー主題

A 共通主題：「大学出版部の役割とは何か―大学の變化と出版活動」

B 選択主題：

(1) 大学出版と編集活動（分科会1）

(a) 学術専門書と教科書と教養啓蒙書、(b) 出版助成金（刊行助成）制度について、(c) 出版の財源について、(d) 読者環境の變化と編集活動

(2) 本を造る（分科会2）

(a) コンピュータリゼーションと本造り、(b) コスト管理と本造り

(3) 本を普及する（分科会3）

(a) 図書館への販売・普及活動、(b) インターネット販売

セミナー主題と国際専門小委員会

昨年末に発足した「国際専門小委員会」（渡辺勲・東京大学出版会、小林敏・慶應義塾大学出版会、笹岡五郎・専修大学出版局、嶋田努・東京電機大学出版局、中村晃司・東海大学出版会）では、三か国の共通理解を深め、継続論議ができるセミナー主題とは何かを巡って議論を重ね、上記の「共通主題」と「選択主題」から成るセミナー主題を構成し「選択主題」の講演には分科会方式を導入することとなった。

大和銀行アジア・オセアニア財団助成と通訳陣

第四回三か国セミナー開催に当たっては、大和銀行アジア・オセアニア財団より国際交流助成を受けることができた。これによって大阪外国語大学、京都大学より合計十名の通訳・翻訳スタッフを確保し、三か国セミナーのコミュニケーション強化を図ることができるようになった。

（国際担当幹事・東海大学出版会）

東京国際ブックフェア2000出展報告

斉藤 勇



東京国際ブックフェア2000開会式

東京国際ブックフェア2000が、本年四月二〇日（木）から二三日（日）までの四日間の会期で、東京・有明の国際展示場「東京ビックサイト」で開催された。

今回は、「子どもの読書年」「オランダ年」「世界本の日サン・ジョルディの日」という三大テーマを中心に展開され、世界二五カ国から五〇〇の出版社が一堂に集結し過去最大の規模となった。

会場構成としては、専門分野ごとに「自然科学書フェア」「人文・社会科学書フェア」「児童書フェア」「編集制作プロダクションフェア」「電子出版・マルチメディアフェア」「デジタルパブリッシング技術フェア」「学習書・教育ソフトウェア」「マンガ・コミックフェア」と八つの区分に分かれており、大学出版部協会は、「人文・社会科学書フェア」にブースを設け、全二五大学出版部の刊行図書の中から一三五〇冊を展示販売した。

その他のイベントとしては、「造本装幀コンクール展」「洋書バーゲンコーナー」「出展者による無料公開セミナー」「教育の情報化支援セミナー」「専門セミナー（出

版総合コース）・（著作権取引コース）」図書館向けには「二世紀向け図書館の役割を考える」など専門的にテーマをしばった各種のセミナーに加え作家によるサイン（即売）会などがあり大勢の人が集まり盛況であった。

その中でも、興味深く感じたのは、出展者による無料公開セミナーの「少部数書籍印刷の革命」である。我々専門書出版社にとっては、避けて通れないことである。

東京国際ブックフェア2000の会期中の入場者は、四万七九八二人と過去最高であり、大学出版部協会のブースを訪れた人は、五〇一三人（一九九九年度〇四〇一九人）と昨年よりはるかに大勢の方が訪れた。

また、会期中は特別価格で四三七冊（一九九九年度〇三五一冊）を販売し、金額では昨年より二八・七％増の成果を収めた。他出版社では一日で一〇〇万円以上も売上げた所もあり、企画運営のリード エグジビション ジャパン（株）によると、どこの出版社も昨年以上の成果を上げたとのことである。

年に一度の日本最大級のブックフェア、過去は、参加すること意義があるとオリンピックのように思われたが、最近では質と実を追求するようになり、その事がフェア自体を活性化し盛り上げていると感じた。最後にフェア前日のセッティングから後片づけに携わった営業部会の皆様、本当にお疲れさまでした。

（玉川大学出版部）



大学出版部協会ブース

遅まきながらの大学出版会—関西学院大学出版会の由来

山本 栄一

関西学院では書籍の出版には早くから取り組んでいたが、独自に出版事業を始めようという気運はごく最近までなかった。それが近年、急に話し合いが始まり、出版会立ち上げに至ったのは、過去にさかのぼるいさか密やかな経緯がある。通常、出版会は学校法人理事会なり大学当局の肝いりで始まる場合が多いと思われるが、完全に大学教員の自発的発意から出発するという、特異な成り立ちを経験している。

一九五九年に生協が設立され、それ以来生協書籍部は書物好きの教職員が集まる場所となっていたが、時間の経過の内に、書籍部の中に出版事業に精通し、また具体的な本作りに関心を抱く職員が育ってきた。書物好きな教職員はこうした職員を囲んで、さまざまな書籍談義を自然に始めることになった。当の職員が核となり、著物好き教員のネットワークが形成されていたから、教員の関心やら専門についての細かい情報を、その職員が最もよくキャッチできる立場にいたと思われる。学内で書籍部に顔を出す教職員は、専任だけではなく、非常勤教員、大学院生といった大学の頭脳が集まっていたことになる。

そのような環境の中から、学内の書評誌を出す計画が浮上してきた。生協書籍部に集まる教職員、大学院生等を核に、学外者も加えて、準備会がもたれ、先の生協職員が事務局を担当するという布陣である。第一号が一九八六年に創刊され、題して『みくわんせい』という。ほぼ六〇頁前後というところで、無料で配布された。この雑誌は一〇号位までは、書籍部の書棚においても学生達にかなりの数が持ち帰られたが、その後、時代の変化からか、急速にその数が減少した。出版もとぎれがちになり、六年をへて九二年、十六号をもって休刊した。書評の会に集まった教職員は、後に学長を初め学部長、理事などに就任する人々も集い、雑誌の発刊は新聞にも取り上げられた。

阪神・淡路大震災の九五年、神戸三田キャンパスに新学部が開設され、理事会、大学とも、これまでになく若い教職員が首脳部に配置された。この年の秋、先の生協職員と教職員有志が集まって、大学出版会の幻を語る機会をもった。まだ何もない時であったが、書評誌発刊に集まった人材が埋み火となって、急速に具体化した。早くもその年の十一月には「設立趣意書」が作成され、十二月五日には第一回

設立準備会をもっている。理事会・大学の責任者からの支援の声に支えられて、法人化の可能性を探っていたが、法人化を待たないで、大学からの資金援助を得られるめどもたったことから、組織化の確認、規約の作成がなされた。

大学教員組合からも資金援助の申し出を受けた。

趣意書にある最も特徴ある点は、「出版権を確保した自立性と企画力」と唱われていることで、大学出版会ではあるが、大学の下請け機関ではなく、自立した企画と編集を可能とする「出版権」をもつという高い理想を掲げている。その意味で、最も積極的に多くの回数もたれたのが、編集長を中心にした編集委員会であった。編集委員会では、企画を立て、執筆依頼をし、原稿の下読み、手直しという編集者の「目」を通した出版を原則として、印税も支払うという本格的な形をとった。その間、取次店との関係、法人化の形態、生協書籍部との間での組織上、財務上の関係の明確化など、さまざまな具体的問題の検討、処理がなされた。

具体的話し合いが始まって一年半、一九九七年四月、出版会会長になる学長を迎え、設立総会が開かれ、評議員、理事が選任され、さらに常任理事、理事長が決められ、編集委員会が発足した。最初の本は、荻野昌弘著『資本主義と他者』（九八年五月刊）を初めとして四点を同時刊行した。当初は年間五冊を目指していたが、昨年末の一年半で六冊、合計十冊の出版にこぎ着けた。ほぼ同時に、富士ゼ

ロックスの協力により、博士論文をオンデマンドで出版登録するというサービスを、出版会インターネット・ホームページで展開している。また、この五月には、『K・G・りぶれっと』と題したブックレットを刊行した。

財務は会計専門の教員が理事として管理しながら、外部の公認会計士を顧問として迎え、指導、監査を受けるという体制も採っている。事務については生協書籍部との委託契約による編集、販売業務の引き受けが現実的であるという判断から、事務局を書籍部に置いている。

今後の課題と夢は、編集委員会方式の出版理念は貫きたいが、かなりの本を出すためには、専念できる本好きが専任としてあたる必要があるだろう。今のままでは、ある程度以上は限界となる。第二は言うまでもなく、法人化である。現在のところ人格なき法人として過渡的な形を取っているに過ぎないから、いずれこの問題を何とかしなければならぬ。理事、評議員、編集委員には、設立当初から、広く協力を仰ぐべく、学外者も加わってもらっている。このことは大学出版会が内向きにならないで、常に社会との接点を求めて、大学が「知の可能性」を担う役割を持続するものと期待している。この仕組みが本格的に機能することも、夢の一つである。

『大学時報』五月号より要約して転載

（関西学院大学出版会理事長）

淀屋橋界隈から全国へ

緒方洪庵の「通信教育」と活動

大阪のメインストリート御堂筋を東に入ると適塾がある。江戸期の町屋を蘭医学者緒方洪庵が塾として使った小さな建物である。内部の見学ができ、資料の展示もある。

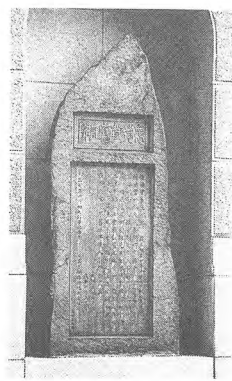
自由な学問 一八三八年に洪庵は塾を開き、ここから福沢諭吉、大村益次郎らをはじめ幕末期に活躍した人々が出たことはよく知られる。西洋の新知識を求めて集う若者は、記録されているだけで六〇〇人以上、実質二〇〇〇人を越える。北海道から九州までその分布は、全国をカバーする。適塾の学風は大阪のこの地域に影響をうけている。塾の開かれる一〇〇年以上前から、すぐ西側に懷徳堂という町入学校があり、四書五経など儒学の基本をわかりやすく教えていた。「商売を勤めるうえで、あるいは日常の生計を立てるために役に立つこと。書物をもたないでも聞いてよい。中途退席も可。貴賤貧富を問わず同輩であること。」という学則は、身分社会の時代としては異色である。

もともと大阪は、武家・官僚社会の江戸とはちがって、町人や農民が自由に学問を愛好することができた。そのた

めに、道徳を教える懷徳堂でさえ学問の向かう方向は多様で独自のものがあった。一七七二年に豊後から出てきた医者麻田剛立は、そんな風潮の大阪にきて懷徳堂から歩いて一〇分ほどのところに学塾を開いた。天文学を好んで観測をしたり、「ケプラーの第三法則」と同様の法則を考え出している。懷徳堂の先生である中井履軒は何にでも興味を持ち、その麻田塾へよく出入りしていた。そこで人体解剖を見学して見たままを『越俎弄筆』と題して解剖図の挿し絵まで描いている。また、天体図を調べてボール紙でつくった模型作品は今も懷徳堂記念会に残っている。そこには知を得る喜びにみちいてはほえましい。

また東に数分行くと薬の道修町として当時からにぎわっており、国内産に加え多くの東南アジア産の薬品類を一手に扱っていた。今も薬会社が並び、その守り神である少名彦名神社境内に最近、道修町資料館ができた。薬業仲間の古文書が大量に保存・展示されている。

こんな隣近所の自由な空気の中で洪庵と弟子たちは医学



懷徳堂跡の碑

に限らず常に新しい科学を求め世界を見ようとした。幕末期になると洪庵は英語の必要性を弟子たちに説いている。

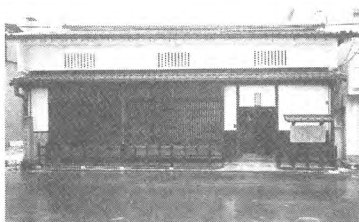
知識から行動へ 一七九六年イギリスでジェンナーが種痘法を発見してから日本へ何度か持ち込まれたが、今とちがつて人から人へ植えつないで絶やさないようにしなければならぬので困難を来した。一八〇〇年代の半ばになって、やっと長崎から京都へと種痘の「タネ」のうけ継ぎに成功したことを知って、洪庵はさっそく大阪での普及をはかって種痘所を開いた。しかしこの事業が、子供たちの命を奪う天然痘の予防であることを人々に認めてもらうのがまた至難のことであった。実際にひとつひとつの効果を得てやっと理解がえられていくのである。その事業は一八四九年―一六八年までの間に地方へと広がっていく。大阪除痘館の支所として許可・登録されている医師名の一覧には、徳島、香川、島根、鳥取、広島、伊勢他一六八人の許可年月日と所在地があり、その様子が手に取るようにわかる。

一八五八年、日本全国に流行したコレラにより死者が多く出、洪庵は予防のためのテキスト『虎狼痢治準』を大急ぎ一〇〇部絶版で出版し、流行した地方に住む門下生や治療に困る医師たちに配り自らも治療に駆け回っている。その活動は今でいう予防医学と公衆衛生学であり、それに保健所の普及相談業務を一手に引き受けているわけである。

このように教育は塾だけに終わらず、洪庵から塾生へ、塾生が地元へ帰って師となり門弟へとその地域への普及に

つとめている情報交換の様子は、洪庵と門下生の往復の手紙に見られる。残されている手紙だけでも一四〇通を越え、これらの手紙をすべて解読された梅溪昇氏の言をかりれば、「今でいうたら通信教育とか生涯学習ですね」。

現在、東京地方のテレビでは手塚治虫のマンガ『日だまりの樹』をアニメとして放映している（大阪でも放送してほしい）。この主人公は、適塾を卒業して江戸に住んだ実在の門下生手塚良庵がモデルである。良庵は手塚治虫の曾祖父に当たる。また今年は、日蘭交流四〇〇年記念イベントで紹介されるので見学者が多い。建物は奥行き長い古い町屋の形式を残しているため、喧騒のオフィス街にあっても座敷にすわれば静寂が得られ、見学者は適塾時代の空間に浸ることができる。懐徳堂の碑や除痘館跡の銘板は今も同じ界隈に残っている。（大阪大学出版会 大西 愛）



適塾

大阪市中央区北浜3丁目3-8

地下鉄御堂筋線淀屋橋下車すぐ

開館時間・午前10時・午後4時（日・月・祝は休館）

TEL：06-6231-1970

大阪除痘館の銘板

適塾のすぐ南

懐徳堂跡の碑

適塾より徒歩2分

道修町資料館（少名彦名神社内）

TEL：06-6231-6958

大学出版部ニュース



山下正幹事長挨拶

▼二〇〇〇年度大学出版部協会通常総会開催される

大学出版部協会の二〇〇〇年度通常総会は四月二八日(金)午後一時から、東京・霞が関の東海大学校友会館(霞が関ビル三三階)で開催された。総会には二二大学出版部から三二人が出席、新規加盟を申請していた関西学院大学出版会から二人がオブザーバーとして出席した。

山下正幹事長の開会の辞のあと、大久保功夫監事(中央大学出版部)を議長に選出して議事が進行した。

一九九九年度の各部・各担当部門の活動が報告され、それを承認、続いて二〇〇〇年度の活動計画と予算案が審議され、全会一致で承認された。

引き続き二〇〇〇年度の役員の改選がおこなわれ、幹事長に山下正(東京大学出版会)副幹事長に山本俊明(聖学院大学出版会)の両氏を選出、その他の幹事並びに監事が選出され各担当を決めた。

▼関西学院大学出版会の新規加盟承認

関西学院大学出版会から大学出版部協会への加盟申請が提出されており、申請内容が幹事長から報告、提案された。提案に伴い、大阪大学出版会・中津雅夫氏から推薦文が読み上げられ、全会員による賛否投票の結果、賛成多数で、準会員として加盟が承認された。

関西学院大学出版会の加盟により大学出版部協会は総勢二六大学出版部となった。

通常総会に続き、三時三〇分から編集部会、営業部会、刊行助成部会の三部会が開かれ、新部会長など役員の選出、二〇〇〇年度の活動計画が討議され新年度の活動がスタートした。

▼懇親会に八五人が出席して盛況

二〇〇〇年度の当番校・放送大学教育



関西学院大学出版会の紹介

振興会の司会のもと、懇親会が五時三〇分から開かれ、当番校を代表して、加藤義行(叻)放送大学教育振興会常務理事が挨拶、続いて山下正幹事長の開会の辞、関野利之顧問の乾杯の音頭で懇親会が始まった。懇親会の話題は関西学院大学出版会の新規加盟のことでもちきり。さっそく同出版会が紹介され、谷川恭生、岡見精夫両氏から挨拶があった。

本年八月には第四回日・韓・中大学出版部協会合同セミナーが琵琶湖畔で開かれるが、三浦義博国際担当幹事(東海大学出版会)からその概略が説明された。

次いで、五人の入れ替わりがあった新幹事の紹介、今年入社の新人紹介など盛りだくさんで春の宵がふけるのも忘れて談笑が続いた。

北海道大学図書刊行会

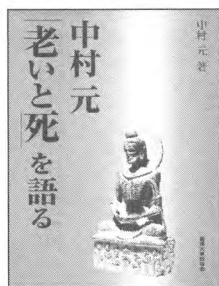
▼桑原真人・田中彰編著『平野弥十郎幕末・維新日記』（A5判・七五〇〇円）幕末から維新期に江戸・横浜・北海道などで台場築造・新道開削等に活躍した一民間土木請負人の日記。詳細な工事記録と、当時の庶民生活の一端がリアルに記された貴重な史料。▼高木俊輔・渡辺浩一編著『日本近世史科学研究―史料空間論への旅立ち』（A5判・八五〇〇円）古代・中世に比べて大きく立ち遅れている近世古文書学の問題点を、個別類型文書の作成・授受関係と史料保管について共通の素材を対象に各執筆者が検討。今後の新しい史料学的发展方向性を指し示す。▼山岸宏光・志村一夫・山崎文明著『空中写真によるマスマーブメント解析』（A4変型・二〇〇〇〇円）重力に伴う地表のマスとしての運動（マスマーブメント）解析における空中写真の有効性と最新技術を論述し、カラー写真とCD-ROMを使用して実際の解析例と解析方法を提示する。▼渡辺康之著『ウスバキチョウ』（A4判・一五〇〇〇円）北海道大雪山系を中心に著者二〇年の撮影活動を集大成したパルナシオロジスト待望の図鑑。

聖学院大学出版会

▼組織神学研究所編『パウル・ティリッヒ研究2』（A5判上製、本体三八〇〇円）パウル・ティリッヒの思想は、キリスト教神学に限らず、哲学・倫理・政治・経済・科学・教育・芸術・精神分析など多様で幅広い領域を扱う。しかし、ティリッヒほど多様な問題領域において体系的に思考し、体系を求めて思索した思想家も二十世紀においては数少ない。本書は、ティリッヒの体系的名著『組織神学』全三巻をほぼ二年かけて研究した共同研究の成果であり、ティリッヒ思想の核心を明らかにし、ティリッヒ思想の全体像を追求する論文集である。ティリッヒの助手でありシカゴ大学教授などを歴任しGilkey on Tillichの著者でもあるラングドン・ギルキー氏からの書き下ろし寄稿論文を二編収録した。▼渡邊守道著『ニコラウス・クザールヌ』（本体価格未定）中世の神学者であり思想家である、ニコラウス・クザールヌス（一四〇一―一四四六）の政治思想を長年にわたり研究してこられた著者の最新の著作。製作が遅れていたが、「クザールヌス生誕六〇〇年」を記念して刊行する。

麗澤大学出版会

▼中村元著『中村元「老いと死」を語る』（本体八〇〇円）人間いかに老い、いかに死すべきか。この大問題を最近の日本人はあまり考えなくなった。近代科学文明という唯物論に毒された現代日本人は、死を一切の終りと考え、長生きすることに腐心するのみで、死から眼をそむけて生きようとする。その結果、死への心の準備を怠っている。しかし、釈尊の原始仏教は、死を見つめさせ、死を見つめることのうちに〈生きる〉ことを教えるようとする。本書は、この仏教の叡智を八十歳時の中村博士が西洋の合理主義思想と対比しつつ諄々と説いたものである。平成五年の中村博士の講演を基に、保坂俊司麗澤大学助教授が編集し、脚註と適切な解説を付している。



麗澤ブックレット
『中村元「老いと死」を語る』

本体800円（税別）
A5判・並製・112頁

慶應義塾大学出版会

▼小松隆二著『公益学のすすめ』（二四〇〇円）いまや教育・医療機関から企業まで「公益」という概念を無視しては通れない。「公益学」とは、このような社会の要請に応えて、今まさに立ち上げられようとしている新しい学問。「非営利分野」の活動・組織を総合的にとらえ、分析し体系化することをめざす。市場原理を超える「公益原理」という新しい価値観を提示。

▼慶應月が瀬リハビリセンター・リエゾン・カンファレンス研究会他著『リエゾン・カンファレンス・リハビリテーション医療における心理的ケア』（二五〇〇円）手術後などの身体的リハビリ医療に際し、精神医学の専門家と連携して症例検討会を組織し、患者の心理的ケアに当たってきた月が瀬リハビリセンターにおける18年の実践活動の成果。これからの医療のための、理論とケーススタディ。

▼岡田泰男著『アメリカ経済史』（二八〇〇円）その歩みを、「南部と北部」「移民と労働者」など、トピック別に解説しながら、米国経済や社会の特徴を明らかにする。

産能大学出版部

▼「IT時代の「課題達成型」目標管理」浅江季光編著（二二〇〇円）

IT技術の猛烈な進展により、これまでの目標管理、方針管理では十分機能できない状況を呈している。

本書は情報社会での管理方法となる具体的なツール「課題達成型」のための目標管理を、ステップとともに示したものである。すなわち、第一義的には個人の役割を明確にし、ベクトルを合わせ企業目的を達成するための手段として。第二義的には、個人の成果を評価し動機づけるための手段である。

▼「マフィー人間関係にまずかない55の法則」マフィー理論研究会編著（一五〇〇円）

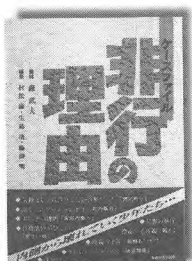
人間関係の難しさ、煩わしさは誰もが感じていることでしょう。マフィー博士は膨大な著書の中で、難しい人間関係を解決した事例、望みを実現するための人との出会いの方法を数多く示してくれました。本書はそのような教えと事例を抽出して今日の問題に当てはめ、人間関係を悩んでいる人、よい人間関係を求める人たちのために書かれたものです。

専修大学出版局

▼森武夫監修『ケースファイル 非行の理由』（二二〇〇円）

園児や児童を対象とした最近の調査では、この数年に自己中心的な子、言動が粗暴な子、すぐパニックになる子、他人とコミュニケーションできない子、親の前でよい子を演じる子、教室で荒れる子などがふえてきているという。本書は家裁調査官、心理技官、都立高校カウンセラー、大学教授らが、現代型非行の特質と実態を掘りさげて報告し、病める社会と子どもとの内面に迫っていく。

【目次】現代型殺人の裏側○女子非行○薬物○パソコン犯罪○親父狩り○ひったくり○家族への抗議○虐げられた少年の怒りと回復○キレる少年のカウンセリング○なぜ立ち直れなかったか○ほか：



玉川大学出版部

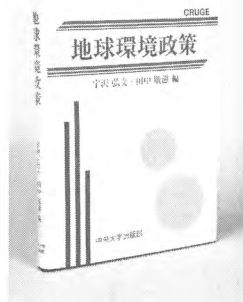
▼M・トロウ著／喜多村和之編訳『高度情報社会の大学―マスからユニバーサルへ―』(三八〇〇円) 高等教育のエリート・マス・ユニバーサル型への発展段階理論(ヘトロウ・モデル)を提唱するトロウが二世紀初頭の高等教育像を展望。高等教育のユニバーサル化、評価、説明責任の問題を捉え直し、情報技術の発達が高専教育に革命的な変化をもたらし、生涯を通じて好きな場所・時に教育する機会を得る段階が到来すると予測。高等教育機会の拡充過程の歴史的推移を見通した、東京大学出版会より刊行中の名著『高専歴史の大学』の姉妹編的存在。

▼D・セイモア著／館昭・森利枝訳『大学個性化の戦略―高等教育のTQM―』(四二〇〇円) 大学を運営するにあたって、もっと良い方法が存在する。産業界で成功を収めた品質管理の手法―TQM(トータル・クオリティ・マネジメント)―である。その哲学にもとづく経営手法を導入し、改善に成功したアメリカの大学の例を多数示しながら、大学の品質向上への手掛かりを教示する。大学の個性確立をめざす大学管理職者の必読書。

中央大学出版部

▼宇沢弘文・田中廣滋編著『地球環境政策』(三三〇〇円) 複雑化し、地球規模で拡がりを見せている環境問題に関して、環境政策と経済的手段の関係を示しながら望ましい政策や制度、将来的な展望を考えるべく具体的問題を取りあげ、理論的、分析的、制度的に専門的観点から論述し、解決策のひとつの参考になることを目指す。

▼真田芳憲著『イスラーム身分関係法』(七五〇〇円) 本書はエジプト、シリア、チュニジアの身分関係法、アラブ連盟の統一アラブ身分関係法案及び非ムスリム国家の全ムスリムを適用対象とするムスリム身分関係法を翻訳し、解題を冠して注釈を加えた、わが国最初の注釈イスラーム身分関係法である。



東海大学出版会

▼図研究会著『図2建築模型の表現』(二五〇〇円) 大学での建築設計製図教育において基礎的部分である建築模型(モデル)の作り方、表現の方法を様々な事例を引用しながらビジュアルにまとめる。

▼平野義明著『ウミウシ学―海の宝石、その謎を探る』(二五〇〇円) ウミウシワールドを探り、そのユニークな行動や生態、進化を覗く後鰓類の生物学。

▼鈴木 徹著『バルト三国史』(二八〇〇円) 北欧・ドイツ・ロシアの三大国家群の中心に位置する戦争の緩衝地帯に存在し、幾度となく占領が繰り返された小国バルト三国の国家形成から、ソビエトからの独立回復までの歴史的経緯を外交官である著者が公平な視点から著す。

▼大数多可志著『コンピュータ・アーキテクチャ入門』(二九〇〇円) データ表現・論理演算からネットワーク・CASまで、コンピュータシステム全般を解説。

東京大学出版会

▼これまでの社会科学は、各専門分野ごとに別々の「言語」で語り、異なる説明をしてきた。同じ人間の行為であるにもかかわらず、経済的行動をしている場合と、法律的あるいは政治的行動、さらに社会的行動をしている場合とで、「共通する要素がない」と仮定することには問題がある。『社会科学の理論とモデル』（小林良彰編集・全11巻・平均定価二八〇〇円）は、そうした問題意識から、さまざまな社会科学における理論とモデルについて整理、紹介し、さらに議論を深めることを狙いとしたシリーズとして、日本ですべて刊行されるものである。▼1選挙・投票行動（小林良彰）、2国際関係（鈴木基史）、3権力（盛山和夫）、4決定（宇佐美誠）、5コミュニケーション（池田謙一）、6集団・組織（森脇俊雅）、7法律（太田勝造）、8官僚（黒川和美）、9行政・地方自治（秋月謙吾）、10社会契約（飯島昇藏）、11比較政治（小野耕二）。▼公共選択論を中心とした数理モデルや計量モデルを分析の軸に据え、社会科学が書き直されるための基礎を提供し、社会科学の「共通言語」の獲得をめざす。

東京電機大学出版局

ある年代より上の男性は、専攻が理系か文系かを問わず、中学校でハンダごて片手に初級の電子工作をしたはずだ。さらにさかのばれば小学生時代、月刊科学誌付録の電気工作に心踊らせた思い出もあるだろう。かつての「ラジオ少年」↓「技術者」というコースが近年、不人気だそう。理工系大学にとっては焦眉の急でもある。▼さて、①は電気回路の常識から説く。ブザーやタイマー、ラジオ、プロگرامming ICを使って、光線銃ゲームや超音波距離計、周波数カウンタと、作るものも高レベル。工業高校・専門学校。③は、電器でおなじみの可変周波数交流変換装置（インバータ）の入門書。アナログ単相インバータを取り上げるが、さらに上級に進むための基礎である。大学生・専門学校・初級技術者向。▼①『たのしくできるやさしいエレクトロニクス工作』西田和明著（本体一九〇〇円）▼②『たのしくできるPIC電子工作』後閑哲也著（本体二七〇〇円）▼③『たのしくできる単相インバータの製作と実験』鈴木美朗志著（本体二〇〇〇円）

東京農業大学出版会

ジブティの沙漠緑化一〇〇景
——もうひとつのアフリカガイド
東京農大沙漠に緑を育てる会編

東京農大は、十年前の一九九一年に創立百周年を迎えた。この時に創立百周年記念研究プロジェクト事業として「ジブティ沙漠緑化プロジェクト」がスタートした。十年のその成果をまとめたもの。写真に木材工学、地水工学、作物保護学、熱帯園芸学、病理学、緑化工学等の専門家の視点で、分かり易く解説されている。特に緑化工法の試みや現地ソマリヤ人との交流については一見一読を薦めたい。

ジブティの自然、ジブティの家畜と動物たち、ジブティの植生、ジブティの人々の暮らし、ジブティの農業の現状、沙漠緑化への挑戦、ジブティの人々との交流の七章からなる。

『モンゴル一〇〇の素顔』『ペルー一〇〇の素顔』に次いで、カラー写真集一〇〇シリーズの第三集である。

平成二年五月刊／B六版／
一三七頁／本体価格一五〇〇円

法政大学出版局

▼《韓国の学術と文化》シリーズ

最も近い隣国ながら、まだよく知られざる国——韓国。本シリーズは、そうした韓国の歴史・政治経済・社会文化・民俗・芸能・思想等々についての、同国の第一線研究者による定評ある學術書を系統的に翻訳・紹介する。これにより、対象としての《韓国》ばかりでなく、同国の人文・社会科学研究の現状と力量をも同時に知ることができるよう。約三十点を刊行の予定。▼原則としてA5判・上製

1 韓国現代政治の条件

崔章集／中村福治訳……三六〇〇円

2 朝鮮王朝社会と儒教

李泰鎮／六反田豊訳……三五〇〇円

3 日清戦争期の韓国改革運動

柳永益／秋月望・他訳……三二〇〇円



第1回配本
『韓国現代政治の条件』

放送大学教育振興会

▼平成十二年度の新刊図書は七十一冊。

放送大学の十二年度開設科目三一〇に含まれ、履修登録をした学生たちの手許に三月末日までに届けられた。

▼新刊図書の履修科目登録者数のトップテンは、①『食生活をめぐる諸問題』②『人格心理学』③『食物とからだ』④『高齢者の心と身体』⑤『家族と生活ストレス』⑥『発達と学習』⑦『母子の健康科学』⑧『現代人のための哲学』⑨『法学入門』⑩『情報基礎管理学』。

▼江溯一公・酒井豊子・森谷正規共編著『共生の時代を生きる——転換期の人間と生活』人間の探究、生活と福祉、産業と技術の三専攻分野で今日的関心を喚んでいる諸問題をとり上げ、学際的アプローチを試みた放送大学主題科目の一つ。二十世紀が残した最大かつ緊急の課題——人間の生活環境をどう改善するか——について、人間と自然・社会環境との関係を、「共生」「調和」の視点から捉えなおすことで解決するように提言している。

▼引き続き平成十三年刊行予定の図書六十四点、二百名近くとなる執筆陣は、取材、執筆、校正にと、おお忙しである。

明星大学出版部

▼塚田紘一著『子どもの発達と環境——児童心理学序説——』近世に至るまで、子どもは「大人の小さい者」と考えられていた。しかしながら、ルソー(Rousseau, J-J.)の子どもを中心にした児童観によって児童は研究対象になる。

ルソーは「エミール」の中で「子どもは大人と違ったもの」であり、不完全な大人としてではなく、子どもとして理解されなければならない存在である」と提言した。大人はかつて子どもだったために子どもの心をあたかも知り尽くしていると誤解していた。その誤解を解き、児童の心理が科学的に研究され始めたのは、わずかに百余年前に過ぎない。それから児童心理学は日進月歩に発達する。本書では児童の心理の最新情報を解説。(目次——抜粋——)第一章 発達の基本的理解、第二章 児童研究の方法、第三章 発達初期の展開、第四章 身体と運動機能の発達、第五章 認知発達、第六章 知能と創造性、第七章 情緒・動機、第八章 遊び、第九章 社会性、第十章 自己意識、自己概念、第十一章 親の児童観と教師・生徒間の信頼関係。

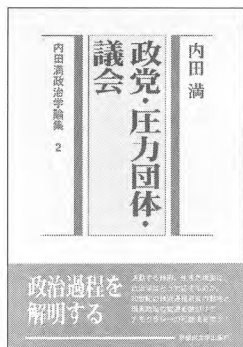
早稲田大学出版部

▼『スウェーデンの地方自治』(A・グスタフソン、岡沢憲美監修／穴見明訳、三三〇〇円) 福祉社会はどう造られたのか。自治を支える行政の仕組みを解明する。

▼『日本の選挙』(福岡政行、二五〇〇円) 一九九六年の衆議院選挙を初め、小選挙区制の問題点、無党派層の政党選択など政治環境の変化と有権者の変貌を分析。

▼『責任の思想』(片岡寛光、三二〇〇円) 責任とは何か。西洋と中国の責任に関する考え方の系譜をたどり、日本で責任思想がどう展開してきたかを探る。

▼『内田満政治学論集(全3巻)』②『政党・圧力団体・議会』(四七〇〇円) 二〇世紀の政治過程研究の動向と現実政治の変遷を跡づけ、理論と実際の両面からデモクラシーの可能性を追究。*内容見本送呈



名古屋大学出版会

▼高橋友子著『捨児たちのルネッサンス 15世紀イタリアの捨児養育院と都市・農村』(四八〇〇円) フィレンツェに残された例外的に豊かな史料に基づき、捨児たちの運命と養育院の姿を描く。

▼佐藤彰一・池上俊一・高山博編『西洋中世研究入門』(三三〇〇円) 邦語を中心に基本的文献を紹介し、研究の現在と読者を架橋するベーシックな研究入門。好評『西洋近現代史研究入門』の姉妹編。

▼稲賀繁美編『異文化理解の倫理にむけて』(二九〇〇円) 異なる価値観のせめぎ合う臨界に立ち会い、思考するとはどういうことか。気鋭の研究者らが触媒となる経験を提示、問題探究へと誘う。

▼井口昭久編『これからの老年学—サイエンスから介護まで—』(三八〇〇円) 老化のメカニズムから、疾病、医療、看護、介護、福祉まで、あらゆる角度から高齢者の問題をきめ細かく解説。

▼松本俊郎著『満洲国』から新中国へ—鞍山鉄鋼業からみた中国東北の再編過程—1940~1964(五八〇〇円) 当初の開発意図を超えてもたらされた物的・人的資源の連続と断絶の諸相を解明。

京都大学学術出版会

▼『西洋古典叢書』第Ⅱ期全31冊・刊行開始! 第1回配本——トウキユディデス『歴史1』藤縄謙三訳・四二〇〇円/読者から再スタートを熱望されていた当叢書が、いよいよ第Ⅱ期全31冊で刊行開始される。初回配本は、難解な名文として名高いトウキユディデスの『歴史』で、わが国の西洋古代史研究の泰斗が二年がかりで新訳に挑んだ力作である。これを筆頭に、『第Ⅱ期』は、哲・史・文のバランスよく、初訳・新訳をまじえて、研究者はもとより本物のクラシックスを求める幅広い愛好家に、ギリシア・ローマの貴重な文化遺産をお届けする。

▼『歴史としての生命』村瀬雅俊著・四八〇〇円/生命とは何か——この根源的な問いに独自の理論構築で応える力作。

▼『アーネスト・F・フェノロサ文書集成』村形明子編訳・五六〇〇円/日本近代の美術・文化史研究に不可欠な資料を整理・翻刻し、解説を付して紹介する。

▼『視線』からみた日本近代」中村隆文著・五二〇〇円/明治期に普通科教育の一つとして導入された図画教育を、日本の「近代化」論の中に位置づける。

大阪経済法科大学出版部

▼監修 能塚正義 梁官洙『東アジア経済の発展と展望』(A5判・二六〇〇円)

復旦大学で開催された経済部会シンポジウムでの諸報告を再編集。90年代後半アジア各国を襲った経済金融危機の特徴と分析。新たな経済発展に向けた各国の経済政策と企業の改革の分析。また21世紀を展望する政策の提言。第1部 アジアにおける金融危機と経済改革/第2部 韓国における金融危機と経済改革/第3部 日本と中国における経済改革

▼伍 躍 著 アジア研究所研究叢書8『明清時代の徭役(ようえき) 制度と地方行政』(A5判・三五〇〇円) 徭役制度とは、簡単に言えば国家が人民の財産や労働力を無償で徴発するものである。

明清時代、国家は社会秩序を形成し維持するために、地方末端組織を組織して、徭役制度を利用していた。第一・第二章で、地方末端組織(錢糧、刑名など)の役割。第三章では、地方倉庫の管理にあたる雑役夫(斗級、庫子)の役割。第四章では、徭役制度と官僚収入との関係など。徭役制度が地方行政の中でどのような役割を果たしていたのか、を解明する。

大阪大学出版会

大阪には世界から物と思想が集積し、日本各地へ供給(情報発信)をなした。

▼脇田修、J・L・マクレイン編『国際交流フォーラム 近世の大坂』四六判・三〇〇〇円 今年の日蘭交流四〇〇周年、国際交流の歴史と未来を考えるうえでまたない機会である。本書で考察されたテーマと演者は左記のとおり。

中世大坂の風景：脇田晴子、近世大坂の都市構造：脇田修、一七世紀大坂の都市空間：J・L・マクレイン、大坂周辺地域の支配：村田路人、浪速五人男：G・P・ループ、町人訴願件：内田九州男、大阪演劇の個人精神：A・ガーストル、大坂の願人仲間：吉田伸之

▼阪大経済学部創設五十周年記念出版『阪大経済学ア・ラ・カルト』A5判・二三〇〇円 キンケイ(近代経済学)のメッカとも称され我が国の経済学を先導した「阪大経済学部」、その研究者たちが経済学・経営学諸分野の内容と学び方を学生・社会人向けに概説。世界と日本経済のダイナミズムを理解するために。

関西大学出版部

▼織田稔著『ことばの研究と英語教育』(三七〇〇円) 日本の英語教育に不可欠の一環として英語科教育はいかにあるべきか。根強い英語縮小廃止論の反省の上に立て、真に自然な人間の言語の教科として、音声と文法の生きた結合の習得にその確立をめざす著者四十年の英語研究の集大成。

▼佐々木土師二著『旅行者行動の心理学』(五〇〇〇円) わが国ではまだ低調な観光旅行者の心理学的研究に関し、外国の研究成果をレヴューして新体系を示した。九章構成で、心理学的研究枠組みを設定したのち、旅行者モチベーション、目的地の認知的魅力と選択過程、訪問地内行動などの具体的領域と類型論的研究を総括し、最後に旅行商品を論じている。

▼名和小太郎著『変わりゆく情報基盤』(三五〇〇円) 情報通信技術のデジタル化とネットワーク化に伴い、コンピュータ・ネットワークとそのアプリケーションは急速に変貌した。対応して既存の法制度も再構築を迫られている。これを同時代的かつ多領域的に整理し、あわせて近未来の姿を予測する。

九州大学出版会

▼クラウス・ヘルト／浜渦辰二訳『二十世紀の扉を開いた哲学―フッサール現象学入門―』（四六判・一九四頁・二二〇〇円）。フッサール現象学は、「人間」の次元の発見によって、二十世紀の哲学に対してまったく新しい思考可能性の扉を開いた。この着想のもとに、フッサール現象学が持つ意味を見据えつつ、初学者のための入門に貢献しようとする。

▼長崎大学文化環境研究会編『環境と文化―「文化環境」の諸相―』（A5判・三八〇頁・三五〇〇円）。本書で提示する「文化環境学」は、環境にかんする諸問題への文系基礎学からの回路を開拓する試みである。「人間の自然へのかかわりかたとしての文化」から、文化の世界としての意味「メディア・言語記号としての世界」までの振幅を考察する。

▼志垣嘉夫著『フランス絶対王政と領主裁判権』（A5判・三三〇頁・五八〇〇円）。本書は、氏が生前自ら構想しておられた「アンシアン・レジーム期フランスの領主裁判権」に関する労作をまとめたもので、わが国の西洋近世国制史研究に多大な寄与をなすことが期待される。

東北大学出版会

▼永瀬正昭『障害者のリハビリと福祉』（A5判・二九二頁・二六〇〇円）。二十一世紀の障害者福祉論を展望した意欲的著作。日進月歩の医学の発展と共に、リハビリテーション工学もめざましく進歩しており、他方では、障害者に対する社会福祉も年々充実してきている。今後の障害者福祉は、脳医学と情報工学の最新知識を取り込み、新しい福祉観に基づいた広い意味でのリハビリテーションを行うこととなる。

▼中山至大・井之口希秀・南谷忠志『日本植物種子図鑑』（四六倍判・六四四頁・一九〇〇〇円）。植物図鑑は数多く出版されているが、種子についての記述は少なく、著者達の多大な労力によって、待望の種子図鑑の発刊が実現した。本書に登場されている種数は約2000種。自然が創り出している造形の素晴らしさをカラー写真で見事に再現した本書は、植物学、生態学、薬学、農学、園芸学、林学、バイオテクノロジー等の分野にとどまらず、美術、デザイン、鑑識、種苗等の実務に携わる人々にとっても必見の書と言える。

流通経済大学出版会

▼『インターネット経済・エネルギー・環境』（J・ロム他）／流通経済大学教授若林宏明訳・約二二〇頁・予価三〇〇〇円・七月発行予定）

原書は、昨年十二月米国のエネルギー・気候変動解決センター（CECS）が発表した報告書である。ここでは、今「爆発的に成長しているインターネット経済のエネルギー消費削減と環境保全への影響について定量的に分析しようとする、全く新しいしかも興味深い試みが為されている。構成は、冒頭が「政策提言用要約（EXECUTIVE SUMMARY）」、続いて第一章「緒言」、第二章「エネルギー消費原単位に影響を与える諸動向」、第三章「インターネットと建物施設部門」、第四章「インターネットと製造生産部門」、第五章「インターネットと輸送部門」、終章（第六章）が「結論」となっている。著者は「結論」の中で、インターネット経済が全部門のエネルギー原単位を減らせるのは、ITの進歩、多大の企業投資、ネットワークのエネルギー節約・環境保全効果などに支えられているからであると指摘している。

三重大学出版会

▼『三重の民俗』（三重民俗研究会編、二四〇〇円）昭和六十二年二月に発足した三重民俗研究会による、三重県の隠れた伝承文化事象や精神文化の聞き書きによる掘り起こしを活かした論集。内容は以下の通り。

- I ヤマトノオロチと竹の民俗
 - II 工場の民俗：四日市臨海工業地帯の場合
 - III 三重雑煮考
 - IV 三重の鵜飼について
 - V 失われゆく庶民の文化遺産「力石」三重県編
 - VI 廃村茨川の歴史と伝承
 - VII ふるさとの民俗
 - VIII 松浦武四郎と蝦夷地
 - IX 郷土をフィールドとした伝承文化の学習と課題
 - X 民俗の奥行きと民俗学の射程：あるいは伊勢民俗の座標
- 貴重な写真や図表が多数収録されているほか、小学6年生を対象とした郷土調査の教育実践や民俗学における地域性の把握など、興味深いテーマが論じられている。

関西学院大学出版会

発達遅滞、とくにダウン症候群を持つ人々の能力を、積極的に変容に導くことを目的とした理論と実践の書、『このままだいい』なんていわないで！（原題・Don't accept me as I am）（R・フォイヤーシュタイン他編著）が、カナダの社会福祉学者、L・B・グレアムの明晰な日本語訳により刊行されました。

人間の認知能力を最大限まで高める努力を行うことで、個人に真の豊かな人生を保証しようとする試みは、障害を持つ人々を「あるがままに」受け入れるという、従来支配的であった理論に真っ向から挑戦するもので、著者らの四〇年以上にわたる実践活動に培われた「認知構造変容理論」に支えられています。かつて『ダウン症の子をもって』を著した、正村公宏氏は、本書を次のように評しています。「著者たちの実践の結果は、ほとんど衝撃的といってもよいのではないでしょうか（…）著者たちの提起している「可能性の原理」は、これからの日本の福祉を考えるうえでも、もっとも基礎的な思想であり、方法であると確信いたします」

（6月刊）

お知らせ

▼京都大学学術出版会の住所が変わりました。

新住所

〒606-8305

京都市左京区吉田河原町

一五一九 京大会館内

（電話・FAXは変更なし）

新刊案内 '00・4 5 '00・6

■北海道大学図書刊行会

空中写真によるマスマーブメント解析

山岸宏光・志村一夫・山崎文明 二〇〇〇円

宣教師ニコライの日記抄

中村健之介・中村喜和・安井亮平・長縄光男編訳 六五〇〇円

アイヌ絵を聴く

現代の労働・生活と統計 谷本 一之 二六〇〇〇円

岩井 浩・福島利夫・藤岡光夫編著 四二〇〇円

輸血学―理論と展望― 池田久實監修・霜山龍志編 二〇〇〇円

北海道の石 戸荻賢二・土屋 篁 二八〇〇円

高山植物の自然史―お花畑の生態学― 工藤 岳編著 三〇〇〇円

蝶の自然史―行動と生態の進化学― 大崎直太編著 三〇〇〇円

■聖学院大学出版会

パウル・ティリッヒ研究② 組織神学研究所周 三八〇〇円

■麗澤大学出版会

鬼来迎―日本唯一の地獄芝居― 生方 徹夫 五八〇〇円

倫理法令遵守マネジメント・システム―ECS2000V1・2の導入と活用法― 麗澤大学経済研究センター 二二〇〇〇円

さらば状況主義国家―日本の漂流を止めるもの― 草柳 大蔵 一六〇〇円

中村元「老いと死」を語る 中村 元 八〇〇円

■慶應義塾大学出版会

現代金融危機の構造 飯田裕康編 二五〇〇円

世紀末からの東南アジア―錯綜する政治・経済秩序のゆくえ―

〈慶應義塾大学地域研究センター叢書〉

添谷秀秀・山本信人編 二六〇〇円
視覚障害教育に携わる方のために「改訂版」

香川邦生編著 二八〇〇円

リエゾン・カンファレンス―リハビリテーション医療における心理的ケア― 乾吉佑／慶應義塾大学月が瀬リハビリテーションセンター・リエゾン・カンファレンス研究会共著 二五〇〇円

伝統中国の地域像〈慶應義塾大学地域研究センター叢書〉

山本英史編著 三八〇〇円

アメリカ経済史 アメリカ経済史 岡田 泰男 二八〇〇円

公益学のすすめ 小松 隆二 二四〇〇円

福澤諭吉を描いた絵師―川村清雄伝―〈Keio UP選書〉

ドイツ農民戦争と宗教改革―近世スイス史の一断面― 林 えりこ 二四〇〇円

野々瀬浩司 五〇〇〇円

■産能大学出版部

儲かる拠点販売の実務 マーフィー人間関係にまつまらない55の法則 野崎 英直 一九〇〇円

経営構想の策定と実現 マーフィー理論研究会編著 一五〇〇円

■専修大学出版局 鈴木 成裕 二六〇〇円

ケースファイル 非行の理由 森武夫監修 二二〇〇円

■玉川大学出版部

「はかる」世界―「魂のはかり」から「電気のはかり」まで―

日英語話し言葉の音声学〔CD・ROM付き〕 松本 栄寿 二六〇〇円

高度情報社会の大学—マスからユニバーサルへ— 榎本 正嗣 三五〇〇円

日本の大学評価〈高等教育研究第3集〉 M・トロウ／喜多村和之編訳 三八〇〇円

大学個性化の戦略—高等教育のTQM— 日本高等教育学会編 二八〇〇円

メディアと生涯学習 D・セイモア／館昭・森利枝訳 四二〇〇円

■中央大学出版部 笹井宏益・山本慶裕編著 二七〇〇円

現代財政危機と公信用 真田 芳憲 七五〇〇円

地球環境政策 中央大学経済研究所編 三五〇〇円

現代日本の金融経済「改訂増補版」 宇沢弘文・田中廣滋編 二二〇〇円

民法総則講義 衣川 恵 二八〇〇円

多文化世界における比較法—新世紀への視点— 吉田 豊 四〇〇〇円

アジア史における法と国家 日本比較法研究所編 二二〇〇円

イデオロギーとアメリカン・テクスト 中央大学人文科学研究所編 五一〇〇円

ウィーン その知られざる諸相—もうひとつのオーストリア— 中央大学人文科学研究所編 四八〇〇円

法律家をめざす諸君へ—二〇〇〇年度版— 中央大学法職講座運営委員会編 二〇〇〇円

遠近法と仕掛け芝居—十七世紀フランスのセノグラフィー— 橋本 能 三二〇〇円

日中の金融・産業政策比較 鹿兒嶋治利・建部正義・田万蒼編著 二五〇〇円

経営管理方式の国際移転—その可能性の現実的・理論的諸問題— 高橋由明・林正樹・日高克平編著 四一〇〇円

■東海大学出版会 グリーン・ツーリズムの潮流

日本語中級I用例集 多方一成・田淵幸親・成沢広幸 二五〇〇円

害虫はなぜ生まれたのか—農業以前から有機農業まで— 蟹江庸子・田中京子 三〇〇〇円

図2 建築模型の表現 小山 重郎 二五〇〇円

水理学の初歩—はじめて学ぶ人のために— 図研究会 二五〇〇円

コンピュータ・アーキテクチャ入門 萩原 能男 一三〇〇円

知の総合化への思考法〈文理シナジー叢書1〉 大藪多可志 二九〇〇円

—科学的思考と直感— 高辻 正基 一八〇〇円

規範と行動の論理学 G・H・ウリクト／稲田静樹訳 四八〇〇円

ウミウシ学—海の宝石、その謎を探る— 平野 義明 二五〇〇円

尿沈渣ガイドブック 伊藤機一監修 四〇〇〇円

土の力学 近藤 博・本間重雄・綿引恵一 二〇〇〇円

骨と関節の不思議—からだを動かし支える仕組みを解く— 今井 望 二五〇〇円

■東京大学出版会 先進諸国の社会保障7 アメリカ 藤田伍一・塩野谷祐一編 五二〇〇円

イメージ—不可視なるものの強度へ表象のディスクール4— 小林康夫・松浦寿輝編 三二〇〇円

The Poetics of Japanese Verse 川本 皓嗣 七六〇〇円

Imagery, Structure, Meter 内破する知—身体・言葉・権力を編みなおす 栗原 彬・小森陽一・佐藤 学・吉見俊哉 二二〇〇円

世界の人口「第2版」 河野 稠果 三二〇〇円

現代中国の構造変動4 政治—中央と地方の構図 天兒 慧編 三六〇〇円

WTO体制の法構造	北岡伸一・御厨 貴編	七四〇〇円
グローバル競争とローカライゼーション	小寺 彰	四二〇〇円
植物の種〈多様性の植物学3〉	森澤恵子・植田浩史編	三八〇〇円
進化と人間行動	岩槻邦男・加藤雅啓編	四六〇〇円
レオロジーと地球科学	長谷川寿一・長谷川眞理子	二五〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録	昭和篇123 唐戸俊一郎	三八〇〇円
帝国議会衆議院委員会速記録	国立国会図書館所蔵	一四〇〇〇円
家族臨牀心理学—子どもの問題を家族で解決する—	国立国会図書館所蔵	一八〇〇〇円
弘安書札礼の研究—中世公家社会における家格の桎梏—	亀口 憲治	三四〇〇円
西洋中世史料集	百瀬今朝雄	六八〇〇円
近世中国の比較思想—異文化との邂逅—	ヨーロッパ中世研究会編	三二〇〇円
二十世紀の戦争と平和〈増補版〉〈UP選書250〉	岡本さえ	一八〇〇〇円
日英交流史1600—2000 2 政治・外交Ⅱ	入江 昭	二四〇〇円
木畑洋一・イアン・ニッシュ、細谷千博、田中孝彦編		四八〇〇円
移民から市民へ—世界のインド系コミュニティ—		六四〇〇円
医療・介護の産業分析	古賀正則・内藤雅雄・浜口恒夫編	四六〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録	国立社会保障・人口問題研究所編	一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会速記録	昭和篇160 国立国会図書館所蔵	一八〇〇〇円
選挙・投票行動〈社会科学の理論とモデル1〉	国立国会図書館所蔵	一八〇〇〇円
国際関係〈社会科学の理論とモデル2〉	小林 良彰	二五〇〇円
近代化と社会階層〈日本の階層システム1〉	鈴木 基史	二八〇〇円
ジェンダー・市場・家族〈日本の階層システム4〉	原 純輔編	二八〇〇円
現代中国の構造変動5 社会—国家との共棲関係	盛山和夫編	二八〇〇円
システムと自己観察—フィクションとしての〈法〉—	菱田雅晴編	三八〇〇円
貨幣と信用—純粹資本主義批判—	村上 淳一	三六〇〇円
サイエンス・ウォーズ	大黒 弘慈	五八〇〇円
工学は何をめざすのか—東京大学工学部は考える—	金森 修	三八〇〇円
アメリカズカップとテクノロジ—	中島尚正編	二四〇〇円
Nippon Challenge America's Cup	宮田 秀明	二八〇〇円
環境地水学	宮崎 毅編	三八〇〇円
バイオメカニズム15—形と動きの探求		二〇〇〇円
加賀殿再訪—東京大学本郷キャンパスの歴史	バイオメカニズム学会編	二〇〇〇円
〈東京大学コレクションX〉		
帝国議会貴族院委員会速記録	西秋良宏・寺島孝一編	三八〇〇円
帝国議会衆議院委員会速記録	昭和篇125 国立国会図書館所蔵	一四〇〇〇円
■東京電機大学出版局	国立国会図書館所蔵	一八〇〇〇円
たのしくできるやさしいエレクトロニクス工作	昭和篇161 国立国会図書館所蔵	一八〇〇〇円
基礎電気・電子工学〔第2版〕〈理工学講座〉	西田 和明	一九〇〇円
	宮入庄太他著	三六〇〇円

図解第二種電気工事士技能試験テキスト

第一種電気工事士テキスト [第2版] 東京電機大学出版局編 一八〇〇円

図解Z80 マイコン応用システム入門 ハード編 [第2版] 電気工事士試験受験研究会編 二九〇〇円

電験三種問題集〈合格精選320題〉 柏谷英一ほか著 三一〇〇円

東京農業大学出版会 山本 忠勝 二五〇〇円

シリーズ実学の森／横井時敬と東京農大 松田藤四郎 七〇〇円

シリーズ実学の森／沙漠よ緑に甦れ 二〇〇〇円

ジブティ共和国十年の熱き戦い 高橋 悟 七〇〇円

景一もうひとつのアフリカガイド 東京農大沙漠に緑を育てる会編 一五〇〇円

法政大学出版局 社会システム論と自然―スペンサー社会学の現代性― 挾本 佳代 四三〇〇円

贈与の謎 M・ゴドリエ／山内昶訳 四〇〇〇円

精霊と芸術―アンデルセンとトーマス・マン― M・マール／津山拓也訳 四七〇〇円

ベルクソン講義録Ⅱ―美学講義／道德学・心理学・形而上学講義― H・ベルクソン／合田正人・谷口博史訳 七八〇〇円

吉田茂リマッカーサー往復書簡集 袖井林二郎編訳 九五〇〇円

ロマン派の手紙―美的主観性の成立― K・H・ボラー／高木葉子訳 三八〇〇円

日清戦争期の韓国改革運動―甲午更張研究― 柳永益／秋月望・広瀬貞三訳 三三〇〇円

遊びとしての読書―文学を読む楽しみ― M・ピカール／及川勲・内藤雅文訳 五二〇〇円

カオスとシミュレーション N・ボルツ／山本尤訳 二五〇〇円

廃墟のなかの大学

B・レディングス／青木健・斎藤信平訳 三五〇〇円

言葉への情熱 G・スタイナー／伊藤誓訳 六七〇〇円

バビロンとパイブル―古代オリエントの歴史と宗教を語る― J・ボテロ／松島英子訳 三〇〇〇円

初期アルファベットの歴史 J・ナヴェー／津村俊夫ほか訳 三三〇〇円

労働社会の終焉 D・メーダ／若森章孝・若森文子訳 四二〇〇円

生殖と世代継承 R・フォックス／平野秀秋訳 四〇〇〇円

反抗する文学―プラトンからデリダまでの哲学を敵として― M・エドモンドソン／浅野敏夫訳 四三〇〇円

実質的現象学―時間・方法・他者― M・アンリ／中敬夫・野村直正・吉永和加訳 四五〇〇円

放送大学教育振興会 舞台芸術の現在 渡邊 守章 二六〇〇円

学校経営と学校図書館 情報メディアの活用 渡部満彦・堀川昭代・山本順一 二八〇〇円

学校図書館メディアの構成 高鷲忠美・志保田務・北克一 二六〇〇円

読書と豊かな人間性 増田信一・朝比奈大作 二四〇〇円

学習指導と学校図書館 高橋元夫・堀川昭代・平久江裕司 二四〇〇円

明星大学出版部 子どもの発達と環境―児童心理学序説― 塚田 紘一 二二〇〇円

早稲田大学出版部 中国史談集 澤田 瑞穂 四〇〇〇円

日本の選挙 福岡 政行 二五〇〇円

責任の思想 片岡 寛光 三二〇〇円

イギリス経済史断章 小松 芳喬 三六〇〇円

スウェーデンの地方自治 A・グスタフソン／岡沢憲美監修・穴見明訳 三二〇〇円

内田満政治学論集(全3巻)第2回配本/第2巻

政党・圧力団体・議会

内田 満 四七〇〇円

早稲田大学理工総研シリーズ第15巻

大都市再生の戦略―政・産・官・学の共同声明―

二〇〇〇円

額賀福志郎・小澤一郎・尾島俊雄編

二〇〇〇円

グローバル化の政治学(日本比較政治学会年報第2号)

三〇〇〇円

日本比較政治学会編

三〇〇〇円

■名古屋大学出版会

西洋中世研究入門 佐藤彰一・池上俊一・高山博編 三五〇〇円

異文化理解の倫理にむけて 稲賀繁美編 二九〇〇円

これからの老年学―サイエンスから介護まで― 井口昭久編 三八〇〇円

「満洲国」から新中国へ―鞍山鉄鋼業からみた中国東北の 松本 俊郎 五八〇〇円

再編過程 一九四〇―一九五四― 和田 光弘 五八〇〇円

紫煙と帝国―アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済― 浜島 信之 四八〇〇円

多変量解析による臨床研究「第三版」

林 行夫 五八〇〇円

■京都大学学術出版会

ラオ人社会の宗教と文化変容

中村 隆文 五二〇〇円

「視線」からみた日本近代―明治期図画教育研究史―

村瀬 雅俊 四八〇〇円

歴史としての生命―自己・非自己循環理論の構築―

村形明子編訳 五六〇〇円

アーネスト・F・フェノロサ文書集成―翻刻・翻訳と研究―

和田 恵次 二二〇〇円

干潟の自然史―砂と泥に生きる動物たち―

トウキョウディデス/藤縄謙三訳 四二〇〇円

歴史 1《西洋古典叢書第Ⅱ期1》

クセノボン小品集《西洋古典叢書第Ⅱ期2》

生命と環境(リレー)講義録・総合人間学を求めて2》
津田謹輔・小川 侃編著 一八〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

東アジア経済の発展と展望 能塚正義・梁官洙監修 二六〇〇円

アジア研究書研究叢書8 大阪経済法科大学・復旦大学共編 二六〇〇円

アジヤ研究書研究叢書8 明清時代の徭役制度と地方行政 伍 躍 三五〇〇円

■大阪大学出版会

大阪経済学ア・ラ・カルト

大阪大学経済学部創設五十周年記念事業委員会編 二二〇〇円

■関西大学出版部

ことばの研究と英語教育

織田 稔 三七〇〇円

変わりゆく情報基盤

名和小太郎 三五〇〇円

経済変動と金融

宇恵 勝也 三二〇〇円

旅行者行動の心理学

佐々木士師二 五〇〇〇円

音楽作品とその同一性の問題

安川 昱訳 二五〇〇円

SMALL BUSINESS IN THE JAPANESE ECONOMY

田中 充 三二〇〇円

二足ロコモーションの意味論

伴 義孝 一四〇〇円

エズラ・パウンドとギリシア悲劇

奥村郁三編著 一六〇〇〇円

令集解所引漢籍備考

沈国威編著 一九〇〇円

植学啓原と植物学の語彙

角山 幸洋 五五〇〇円

ウィーン万国博の研究

設立関係書類(上・下) 浦西和彦解題 各一五〇〇円

フランス絶対王政と領主裁判権

志垣 嘉夫 五八〇〇円

長寿の要因―沖縄社会のライフスタイルと疾病―

終山幸志郎編 八〇〇〇円

現代経済の課題と分析

伊東弘文・細江守紀編 三二〇〇円

概説 家畜感染症学

井上武・林俊春・岩田祐之・前田健 二六〇〇円

中谷間橋梁の動的耐震設計

大塚久哲編 五八〇〇円

環境と文化―「文化環境」の諸相―

長崎大学文化環境研究会編 三五〇〇円

欧州統合とフランス産業〈佐賀大学経済学会叢書6〉

古賀 和文 四六〇〇円

アメリカ行政の理論と実践

今里 滋 四八〇〇円

多文化社会への眼差し〈九州産業大学公開講座17〉

時永 祥三 二〇〇〇円

Excelによる経営データ処理「改訂版」

住田 正樹 一八〇〇円

子どもの仲間集団の研究「第2版」

八四〇〇円

Molecular Targets for Hematological Malignancies and Cancer

仁保喜之編 六〇〇〇円

■東北大学出版会

障害者のリハビリと福祉

永渕 正昭 二六〇〇円

日本植物種子図鑑

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 一九〇〇円

■流通経済大学出版会

FD版図書館データベース

HDI編 四八〇〇円

『おくの細道』文字データベース

濱森太郎編 六四四〇円

■関西学院大学出版会

「このままでいい」なんていわないで！

―ダウン症をはじめとする発達遅滞者の認知能力強化に向けて―

フオイヤー・シュタイン&ランド/L・グレーム訳 二八五〇円

提喻詩人ロバート・フロスト 山田 武雄 三五〇〇円

カントとヘーゲルの歴史哲学―歴史の中で―

槇本 庸男 二四〇〇円

〈関西学院大学研究叢書93〉

集団規範の実証的研究

―拡充されたリターン・ポテンシャル・モデルの活用―

佐々木 薫 四五〇〇円

〈関西学院大学研究叢書94〉

パスカル『プロヴァンシアルの手紙』

―ポール・ロワイヤル修道院とイエズス会―

森川 甫 八九〇〇円

〈関西学院大学研究叢書95〉

近世文学の展開

森田雅也編 一八〇〇円

おそろのおそろの大学論―「社会科学入門」の入門―

山本 栄一 七五〇円

〈K・G・りぶれっと0〉

現代フランス恋愛小説講座

海老坂 武 七五〇円

〈K・G・りぶれっと1〉

少子高齢社会の展望―成熟社会への提言―

浅野 仁 七五〇円

〈K・G・りぶれっと2〉

循環型社会の可能性―いま変わらなければ―

松本 有一 七五〇円

〈K・G・りぶれっと3〉

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324
麗澤大学出版会	〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1 TEL. 0471-73-3331 FAX. 0471-73-3154
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-6926 FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230 FAX. 03-3263-4288
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 042-739-8935 FAX. 042-739-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7 TEL. 03-5214-5540 FAX. 03-5214-5542
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 042-591-9979 FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8305 京都府京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-6877-1614 FAX. 06-6877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-6368-1121 FAX. 06-6389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777 FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県竜ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356 FAX. 059-232-1356
関西学院大学出版会(準会員)	〒662-0891 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155 TEL. 0798-53-5233 FAX. 0798-53-9592

大学出版(第46号)
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版部協会
E-MAIL: mail@ajup-net.com URL: http://www.ajup-net.com/

2000夏 平成12年7月1日発行 発行所/大学出版部協会

電話03(3812)2111(内)87956

頒布価格100円 千共